

「日本幼児保育史」研究余滴（八）

木原 溥子

日本保育学会で日本の幼児保育史の共同研究を始めたのは、わが国の幼稚園八十周年記念としてでした。今年はまだ百年記念の年ですし、私が研究に参加していた期間は、ごく初めの明治期の頃を探っていた時ですから、かれこれ十五年も昔の事になりません。その頃の事を書くのですから、正直なところたいへん困りました。全六巻の研究を成し遂げた先生方には、記憶に新しい山ほどのこぼれ話がありましようから、それをもっともっと聞かせていただきたいと、私の方で思っていました。ところが今度は私が書く番だとのこと、夢のように過ぎた昔を思い出し、また、書かれることのない部分をこの際書いてみるのも一つの意味があるかと思ひ返して、重い筆をとることに致しました。

かけの協力者

研究の手始めとして私がしたことは、「創立の古い幼稚園に関する調査」でした。当時、倉橋・新庄共著『日本幼稚園史』があ

りましたが、これはお茶の水幼稚園の資料を中心にとめてありましたから、他系統の幼稚園については書かれていません。そのためにも地方の埋もれた資料を、これ以上なくならないうちに発掘しようというわけでした。委員長の村山先生と何回か会合して、項目を作成し、印刷してみたなら、五枚もの調査用紙になっておりました。実を言うと、このような調べ方でよいものかどうか、適切でないような気もしたのですが、何しろ資料が戦災で焼失、散逸してしまっていますから、手がかりになるものなら何でもといった気持ちがありました。

この調査用紙を昭和三十一年の秋から翌年にかけて、現存する歴史の古い幼稚園には全部送って、御存じの限り御協力を仰いだのでした。

このような調査の仕方は、依頼される先方にしてみれば、たいへん迷惑なことです。ほとんど御返事をいただいたように思います。但し、項目の大部分が不明というものもたくさんありまし

た。けれども、おわかりになる事についてはたいへん詳細に、その上何処の〇〇氏に聞けばまだ何か知っている筈だとか、親切にこまごまと教えて下さいました。これらの資料は共同研究のメンバー全員で活用させて頂きました。

それにつけても、早く研究がまとまってそれをお見せできれば、こちらの感謝の意を十分伝えることができたのですが、研究は遅々としてはかどらず、一枚の御礼状を差し上げただけになっていた事に、ひそかに心苦しい思いを抱き続けたものでした。

今、全六巻を通して見たとき、私を除いた共同研究メンバー諸氏の頑張りもさることながら、多くのかくれた協力者に改めて感謝の意を表す次第です。

現場保育者の身元を調べて

幼稚園の歴史を探っておりまうとき、当然のことながら保育の名が出てきます。園の創設、実際の保育等まさに幼稚園の歩みと、喜びも苦しみも共にした中堅保育者ということになるのでしよう。そういう方々の氏名だけは割合に得られたのですが、その先は悲しいかな、よくても大まかな経歴程度ということになってしまいます。

ところが、そのばらばらの人名をかかえておりますと、幾つか

の事に気付きました。中でも次のような事は、その後私の胸に刻み込まれてしまいました。即ち、園の歴史に名を残している保育の出身校が偏っていることでした。それは主に、東京女子師範学校保育練習科、北陸学院、ランバス女学院保育専修部（現聖和女子大学）などでした。

保母養成の姿については、水野先生が丹念に資料を集めておられました。その姿を眺めますと特に明治期にはその数もそれ程多くなく、しかもそこに入学できる女性も極めて限られた人というところもあります。しかしそれ以上に、養成校のあり方——創立の精神とか、社会への使命感——がその後の社会的活動に大いに関係していると思えてなりません。教育の成果はそこを築立った卒業生によって受け継がれ、生きているものだ、そんな当たりまえの感慨が改めて私をとりこにしてみました。

北陸学院の場合には、創設者のミス・ポートルが、横浜から神戸まで汽船に乗り、三日かかって大津に着き、柳瀬を経て漸く金沢に着き、また、幼稚園のためのよき協力者であった吉田えつ女史を東京に迎えに行くのにもやはり、普通では投げ出したくなるような交通の不便や苦勞をのりきって、金沢の地に幼稚園、そして保母養成の仕事を始めました。その開拓者精神と情熱は、そこに集まる子女、生徒の心をゆさぶるに十分であったと想像で

きるのです。そこで教えられた教育の精神が、日本中に活躍する子女を育てあげたのではないかと思いました。

これは一例にすぎませんが、現代でも、養成機関が違うと、育つ卒業生のタイプがずいぶん違うのではないのでしょうか。現代は幼稚園がたくさんあり、教師の養成機関もたくさんあります。しかし、養成機関がどのような保育者を育てていくのか、歴史は私に貴重な考える材料を提供してくれました。この事は現在の私の教員生活を支えるバックボーンになり、力となっております。

さて、話を「保育史研究」にもどしまして、私は、有名無名の過去の保育者についてもっと詳しく知りたいと思いました。ノートにリストを作ってみたり致しましたが、何しろ昔の事とて、おまけに、私の牛歩の如きやり方では遂に満足のいくものとならず、そのまま消えてしまいました。でも、一人の女性が保育者として育ちゆく過程は、大切な事のように思います。幼児保育の原動力は保育者個人に負うところも大きいと思いますので、このあたりの事をもっとよい方法で研究でき、歴史の上に残せたらよかったです、未だに心にかかっております。

歴史の誤謬、信びよう性について

ある日私は、津守先生のおともをして、明治の頃保育施設があ

ったという地を訪れました。その跡には、現在立派な女子教育の学校が立っていました。玄関に立つと校長先生が迎えて下さって、この学校の歴史や女子教育のことなど良いお話をいろいろ伺ったのですが、私共が最も知りたがっている事については全面的に打ち消されるのでした。

「私の学校では小さな子どもを預ったような事実はありません。そんな事とは何のかかわりもなかったのですよ」とおっしゃいました。当然その事にふれてお話し下さるものと期待しておりましたから、ショックでした。

その帰路、ある研究からその施設を紹介することになったT氏が夢のように現われて、(津守先生が御連絡をとられたのですが、ちょうどそんな感じでした) その方から、これまたいろいろな話を聞きました。その中でT氏は、「この学園の五十年史? (私の記憶が曖昧で申しわけありません) にはその事が書いてあったのですが、十年後、代がかわってできた記念史ではその部分が削除されているのですよ」とお話しになりました。T氏はそれについて考えをお持ちで、私にはよい勉強になりました。

私は「歴史」の読み方というものを考えました。ある人たちにとっては誇り高き事業も、立場が変われば、歴史の流れの中で何の意義もない、また、時には邪魔になることもある、ということ

を知りました。

この日私たちは、夏の長い日をいっぱい歩き回りました。最後に立ち寄った所では素晴らしい発見があり、津守先生が目を輝かされたのが印象的でした。

話は変わりますが、それと似たような事がまだりあます。例えば、古老にお話を聞くようなとき、当然の事でしょうが、主観を交えてお話しになることがあります。立派な方ほどよく覚えていらつしやるし、お話の内容も豊富で、聞き手もその中にひき入れられてしまうのですが、主観が加わります。私共後輩が先入観なしに大先輩の思い出を伺うときには、この問題が極めて大きな影響を与えることになるので、聞き手としては一層の勉強を必要とするものだと思います。

かえりみて

大学の卒業論文で「フレイベル」のことを学んだ私は、今度は身近な日本の幼児教育のことを研究してみたい、その一つとして、幼児保育の歴史を調べてみたいと思っておりました。それを津守先生にお話ししたことがございました。昭和三十一年七月「日本保育学会で日本幼児保育史の共同研究をする事になったので、貴女もメンバーになるといいですね、推薦しておきまし

た」とのお言葉でした。若かった私は、自分の非力もかえりみず、とにかくやってみようと考えました。これが私の参加の動機でした。

けれども間もなく、これはたいへんな事をお引き受けしたものだど気がきました。

過去の保育の姿をある面から浮き彫りにし、一つの研究としてまとめるには、有用な資料の他に、何十倍もの価値の不明な資料があり、判断力のなかった私がそれらを片端から手当たり次第に集めていた事は、今思えば、むだな動きも多かったと思います。役に立たなかった昔の絵本が今だに私の手もとにころがっている始末です。しかし、及ばずながらも若き日の学問に対する情熱を傾ける対象ができ、その歳月を持ち得た事は、幸せな事だったと思っております。

委員の先生方の馬力は本当にすごいものでした。資料をいっしょに写したり、昭和三十二年頃の夏の夕べ、みんなで神田の古本屋を片っ端から歩いたり、何回かの打ち合わせ会の席では、新たな発掘資料の交換があったりしたのですが、とにかくそのファイトは感歎に価するものでした。その際、自分は何の役割を果たしたのかな？と考えてしまいます。

その後、昭和三十五年頃？から「研究を急いでまとめてほし

い」と催促がかかるようになり、委員長の村山先生はじめ各先生方が分担して、明治期の資料を急ピッチでまとめ始めました。それを毎月『幼児の教育』に載せることよってはかどらせることになりました。当時私は、『幼児の教育』誌のいわゆる編集実務をしておりましたので、諸先生への毎月の原稿の催促役ということになってしまいました。でも、そのおかげで少しでもはかどっていったのはとても嬉しい事でした。昭和三十六、七年頃の事です。その後、私も個人的に忙しくなり、共同研究のメンバーからは自然に離れることになりました。

村山先生がこのシリーズの冒頭（一月号）に「共同研究というもの、たいへん困難が多く、いい加減に始めるべきでないという気がする」と述べていらっしやいましたが、私も村山先生とはまた異なった意味も加えて、本当にむずかしいものだと思います。しかし、保育史の場合は何しろ大きな仕事でしたから、共同研究にして、まとめ得たものだと思います。

私は保育史の共同研究を通して、ずいぶん多くの事を学びました。多くの方にお世話になり、故人になられた方をも含めて、たくさんの知己、友人をもてたことも幸いでした。

現在私は、幼稚園教師の養成の仕事についております。その職務への精神的支柱は、他ならぬ保育史研究の産物でした。

× × ×

なお最後に、明治三十年代後半頃の幼児教育に対する一つの考え方を現わす例として、次の談話を御紹介致します。共同研究ではとりあげてありませんが、興味ある記事のように思われます。

「上流社会に於ける幼稚園の必要」

東京府女子師範学校長

兼東京府第二高等女学校長

林 吾一氏談

「是等の僕婢たる極めて非教育的にして徒に児女の気嫌を損せざらんことのみ努め未だ教育の何たるを解せず況んや同等の権力を以て之に交際することなどは思ひも寄らざるなり、然るに幼稚園にありては同年輩の兒女然も同等の権力を有せる兒女相集まるを以て対当の交際は是に於て始めて実現することを得べく兒女をして傲慢不遜の念を去らしめ、人も物も必ずしも我身一つの為めにあらざることを悟らしむるを得」(漢字のみ現代式に改め、あとは原文のまま) 『婦人と子供』 六巻四号 明治三十九年

(洗足学園短期大学)

(このシリーズは今回で終ります)